

旺盛な好奇心が活力源
“楽しんで撮る”を体現
西本喜美子写真展に学ぶ



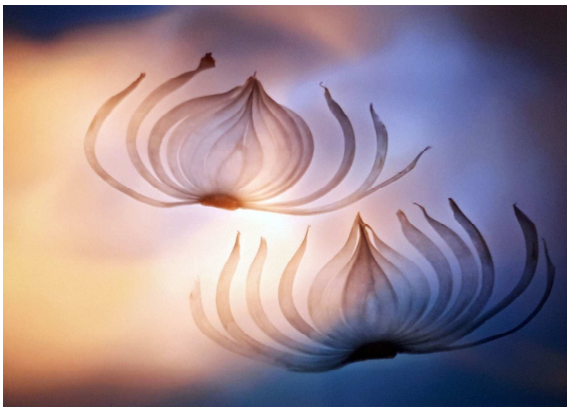
記念撮影に応じる西本喜美子さん（中央）。右は息子の和民さん＝6月2日、文化フォーラム春日井・ギャラリーにて

ユーモラスな自撮り写真で人気のスーパーパーおばあちゃんこと、西本喜美子さん（90）の写真展が春日井市であり、トークイベントも開催された6月2日、足を運んだ。

腰が悪くて杖が手放せないという喜美子おばあちゃん。それでも首には常にニコンのデジタル一眼レフをぶら下げ、来場者へのサインや記念撮影に長時間、ひたすら笑顔で応じる姿には感服させられた。その彼女が写真を撮り始めたの

は72歳。息子の和民さん（62）が主宰する写真講座へ、生徒たちに強引に誘われて入ったのがきっかけだったという。その2年後にはパソコンでの画像加工にも挑戦。最初は横文字の用語に苦戦するも、今では「何度もやっていると体が覚えてくれる。難しいことはない。何でも出来て楽しい」というから恐れ入る。一連のおもしろ自撮り写真も2、3パターンの定番操作で出来るというから驚きだ。

しかし、この日まで「愉快的な自撮りだけやっている人」というイメージは見事に覆された。ひとしきり続いたセルフポートレートが終わると、



一転、素敵なデジタルアートとテールブルフォトたちが目に飛び込んできた。とても目の前のおばあちゃんが手掛けたとは思えない作品の数々。さらにテールブルフォトのいくつかに、ほのぼのとしたエッセーまで添えられていた。その一つが左の作品だ。

……

地元の写真コンクールに応募してみた。「こんなの写真じゃない」と言われた。写真なのに……でも先生は「いい写真だ」と言ってくれた。だから東京のコンクールに出してみた。そしたら賞をもらった。初めてもらった嬉



しかった。どんな写真も自分が楽しんで撮った写真は必ず輝いている。信じてよかった。……

会場に掲示された挨拶文にはこんな一節もあった。

……

何事も「うまい・へたはあるだけ」「いい・わるい」はない。……

腰の関係であまり出歩けず、撮影は専ら自宅かその周辺という彼女。目に付いた物は何でも作品になると言い切る。和民さんは「撮影者である前に表現者であれ」と説く。写真と末永く付き合う極意に触れたような気がした。（日置）

カメラ越しの目で生きていけたら

カメラは最も身近にある「発見」の道具です。

いろんなモノを自分の好きな角度からのぞいてみる。

そう、別世界との出会いの瞬間です。

今まで見過ごしていたモノたちが、すべて宝石のように輝いて見えます。

そして、自分の気持ちが光った瞬間にシャッターを押す。

ただそれだけでいいのです。

人の目には、いろんなモノたちが広範囲で見えています。

見たくもないモノまで見えてしまっています。

でも、カメラを使うと、見たいモノだけを見ることが出来ます。

自分が好きだと感じた部分だけ見ることが出来る・・・

それは間違いなく幸せなことです。

人は、生きていく上でいろんな人と出会います。

自分も含めて、人にはイヤな部分がたくさんあります。

けれど、人のステキな部分だけを見ることができたら・・・

きっと、幸せな人生が送れるでしょう。

カメラ越しの目。

もっと早く気付いていればよかった。

誰もがそう思います。

自分なりの写真作り

カメラをのぞいて見つけた「別世界」。

さて、今度はこれをどのように作り上げるか。

そのままでいい。色や質感を変化させてもいい。

カメラをのぞいた時の感動を倍増させるように。自由に作り上げればいい。

誰かに何かを言われる筋合いはないのです。

それは写真の長い歴史が語っています。

先人たちの自由な表現こそが、新しい写真表現の道を作り上げてきました。

誰かが決めた「枠」に縛られるのではなく、

自分の思うがまま、自由に作り上げてほしい。

写真表現に限界はない。

限界がないからおもしろい。挑戦の繰り返し。感動の繰り返し。

一生懸命に作られた作品たちには、作者のみが知りうる苦労と情熱が注がれています。

そうやって生まれてきた作品たちに「うまい」「へた」はあっても「よい」「わるい」などありません。

展示された一枚一枚の写真たちは、彼等の実験と情熱、そして「遊び心」の産物です。

この写真展で、愛すべき彼等の「遊び心」を、多くの方々に感じていただきたい。